

第1回「学び」の選択肢拡大に向けた検討懇話会 提出意見

清水 潔

具体的提案に向けて

8月23日（日）第一回懇話会に出席できず、申し訳ありません。同日に、私共の大学の卒業生が集合する館友全国大会が愛媛県松山市で開催されることが1年前から決定しており、学長として欠くことができないためです。どうかご賢察ご海容下さい。

学ぶ人のための教育施策を充実することを目指して、①「学ぶ場」②「教育内容」③「教育手法」④「教育制度」⑤「教育政策」の5つの多様性のなかから、地方創生につながる「学びの選択肢拡大」に向けた先駆性のある提案を導き出す趣旨と承りましたので、いま考えている構想をメモ風に記して、自由討論に資したいと思います。

■文理融合型の情報科学、情報デザイン学の研究教育拠点の形成

総務省の「高度 ICT 利活用人材育成プログラム開発事業」や日本学術会議情報学委員会の「ビッグデータ時代に対応する人材の育成」提言を観れば、文系理系を超えた情報サイエンス人材が我が国に求められていることは明らかである。この社会における知識創造、意志決定、産業イノベーションを担う可能性をもつ人材育成は、欧米に遅れを取っていることも事実である。

将来を担う子ども・若者たちにとって、プログラミング言語の習得は、国語、英語の習得と同様に必修の言語であると考えられる。大学においても、工学部の情報学系で養成している情報科学の人材のみでなく、ウェブデザインや映像・音響デザイン、ゲームクリエイター、情報セキュリテーター、統計分析等を担える文理融合型の情報科学、情報デザイン人材を本県に於いて養成する必要と価値は十分に存在すると考えられる。

■三重県にない「学ぶ場」でいえば、外国語学部・学科がある。近県に実績を積んだ大学があるために、新たに本県に創設してもどれだけ志願者を集めることが出来るか疑問もある。18才人口の県外流出を防ぎ、グローバル人材の養成を本県が行政・企業産業・教育界一体となって支援する体制が形成されれば、創設維持することも可能となろう。

■いま大学図書館が、アクティブ・ラーニングを支援するライブラリー・プラザとして変容するという新潮流が生まれている。静かに読書し調査研究する場から、アカデミック・コモンズとして、知識を批判的に検討し、議論しながら結論に導くことによって、積極的自主的学習態度が養成されていく。本学でも昨年eラーニングを導入したこともあり、図書館入館者数が前年度比33%増加し、また外部大学研究機関への文献複写依頼件数が前年度比26%増加した。画期的な学生の自主的学習態度の変化である。

三重県の小中高校の図書館活動の実態に明るくないが、既にある図書館の活用を工夫することによって児童生徒の学習意欲を活性化することが可能であろう。少子化によって余った教室を第2図書館として電子メディア等も導入し、図書館活動を通して学校自身による教育活性化に繋げる試みは、以下の点でも重要ではないかと思う。

■「読書推進」による「国語力日本1」を三重県の小中高校が目指してはどうか。三重県の子どもの学力が全国の下位のまま改善の萌しがみえないことは、残念至極である。あらゆる学力の基礎が国語力にあることは、多くの識者の指摘するところである。国語力を高めることは学力全体によい影響を与えると思われる。

因みに三重県は、本居宣長とその弟子、芭蕉、荒木田久老ほか神宮学者、谷川士清、橘守部、佐佐木信綱ほか日本を代表する古語古典の研究者、洗練された日本語の究極の詩である俳句、和歌の完成者とその継承者を輩出してきた地域である。

日本民族を日本民族たらしめている根源は母国語であり国史である。三重県が「高い精神性」をいまに伝える地として外国からも日本人からも仰がれるためにも、どの県にも先駆けて優秀な国語力を備えた青少年を養成すべきであろう。そのことが外国への日本文化発信の原動力ともなる。

因みに、英語教育を小学生低学年段階から学校教育に導入しようとしている。その必要性も将来性も是認せられようが、それならば、これまで以上に国語教育が重要であることを認識しなければならない。母国語こそが人間の知識、思考、感性、徳性の源泉である。

思いつくまま記しましたので、文章整わず、説明不足の憾がありますが、取り急ぎ義務の一端を果たす意味で、提出させていただきます。